



西麻生の子供組、天神講の記録

十二年子供中とあり、天神講組合一六人、最年長者を尊長といい、宿持廻り、酒一二銭、砂糖九銭、油揚一〇銭、しおびき三〇銭、醤油一升一七銭などあり、酒は、子供たちであるが、やはり神酒として供えたものらしい。明治三十四年十一月八日の記録などには「学校は休むべし」などあるから、まだ学校教育より、部落の慣行的行事の方が、信仰も含んでいて、強かったではないかと思われる。

信仰の講組織はたくさんあって、その中には火難よけの下野にある古峯神社へ代参を送った代参講のようなものから、伊勢講、飯豊講などの同行者講があったり、農業生産と一体をなして、春秋二回馬の手入れをした馬頭観音講、これは、村端れの草原などに、馬のつくくらい場などがあって、伯楽を呼んで馬の手入れをして、終って、重箱くらい持寄って馬頭観音を祭った講組織であった。

下荒井村にたないけ組のあったことを調査したことがあるが、これは他の部落にもぼつぼつあった。春早くたないけをかいはして、泥をあげ、たねがますといった小さいかますに種籾を入れて発芽を早めるために、池にひたすが、たないけは各屋敷に必ずあるとも限らないから、もより三、四軒で共同で用い、いくらか御苦勞酒のようにして、共同飲食などをしていた。農業技術が変わって、種籾を永く池にひたすこともなくなつて、消失した組織である。

しかし部落とか、組の社会生活、相互援助として、実生活に最も密接なものは葬式の際の援助である。婚礼、